



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	『盆石皿山記』小考
Author(s)	湯浅, 佳子
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 55: 231-238
Issue Date	2004-02-27
URL	http://hdl.handle.net/2309/2691
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

『盆石皿山記』小考**

湯浅佳子

(国語国文学)

一、はじめに

曲亭馬琴著『盆石皿山記』(二巻二冊、前編文化三年、後編文化四年刊)は、「伝説もの」に分類される中本型読本である。

本作品の典拠として、麻生磯次氏は番町皿屋敷・鉢かつぎ・苅萱桑門伝説を、また横山邦治氏は浄瑠璃『播州皿屋敷』(為永太郎兵衛・浅田一鳥作、寛保元年大坂豊竹座初演)を、中村幸彦氏は紅皿欠皿伝説を、さらに高木元氏は「皿山」「継子の椎拾い」「継子と井戸」などの口承伝説等の典拠を指摘している。本論では、それらの指摘をふまえつつ、『盆石皿山記』の物語がどのような典拠作品に基づきながら描かれているのかを述べてみたい。

二、内容分析

(1) 明徳の乱

第一回「牝恋ふ鹿」の冒頭には、まず木村源七という人物が登場する。その経歴について、源七はもともと雲州富田の城主塩治駿河守師高の家臣であったが、師高は応永元年に山名満幸の謀反に与って破れ自殺したとある。これは、山名氏清・満幸が足利義満に反した明徳の乱のことである。『明徳記』『本朝通

鑑』『後太平記』等はその記事があるが、塩治駿河守の「師高」の名を記している書として、管見の限りでは『本朝通記』(前編二十五巻後編三十巻、長井定宗編、元禄十一年刊)に、応永元年ではなく明暦三年春二月の項に次のような記述がある。

佐々木高明、家人等を遣して雲州の賊を討ず。塩治師高自殺し、雲州悉く定る。(後編、巻之十六、33ウ、盛岡市公民館所蔵本)

『盆石皿山記』ではそうした歴史上の人物に、架空の人物である木村源七という人物を設定したのである。

(2) くじかの怨霊

明徳の乱で敗走した木村源七は、連れていた姉の子、三重之介(のちの勇蔵)を見失い、美作国久米の皿山の獵師、長助のもとに留まる。以後、源七は長助とともに「只管殺生に心を委ね」(第一回、2ウ)、冒頭にいう「究てすまじき業」(一オ)という「無益の殺生」(同)の罪を重ね、ある日牝のくじかを殺すことでその祟りを受けることになる。以後、物語をおしてくじかの怨霊はしばしば登場し、源七とその家族や広岡兵衛に災いを及ぼしている。それらをあげる。

① 源七の妻と妾に嫉妬心を起させぬ。(第二回)

② くじかが源七に化け、落穂に鹿の子を生ませる。(第四回)

③ 広岡兵衛に射られたくじかが、兵衛を罪に陥れ、飲皿の幽霊に化けて井戸に現れる。(第五回)

④ 勇蔵が仕留めたくじかの皮で作った襦袢が、赤松義則の嫡子佐用丸を包み込んで飛び去り、広岡はその責を負うことになる。(第六回)

⑤ くじかの怨霊は、広岡兵衛とその一族を滅ぼす。(第七回・第九回)

という場面である。一方、くじかの祟りを引き起こした木村源七は、出家して角阿弥と名乗り、寂霊和尚の弟子となる。そして最後に、和尚の済度によってくじかの霊は漸く成仏し、赤松義則の嫡子佐用丸が無事に戻ってくることで物語は終結する。

なお、このくじかの祟りという話の類話については、第四回に「鹿の妖怪ある事」(7ウ)として、唐山淮南の陳氏が女子に化けた鹿に会った話と、源経基が大鹿を退治した話をあげている。しかし、①⑤の話のように、くじかや鹿が人に祟るとか、鹿の子を生んだ女人の話といった説話については、現在のところ類話を見出し得ていない。ただ、『奇疾便覧』(五巻五冊、正徳三年刊)に、次のような話がある。

名医類案に曰く、至正の末、越に夫婦二人あり。木善寺の金剛神の側に縛草して「注・縛は房なり。草にて算たる家なり」其の婦を居住す。一子を産めり。其の児の形、首兩額の角に肉起つて角のごとく、鼻孔昂縮し「昂は字書に拳也。高なり。鼻の孔のたかくあがりしゝまりしかみたるなり」さながら夜叉の形に似たり。蓋し産婦、是に居する故に、偶其の縁に触れ感じて此形を受得たり。古人の胎教謹まずんばあるべからず。又曰、警昌高八と云もの、軒堀の間に筆を畜こと巳に数年、子を生じて百に餘り、其家の産する子、四五人、皆亀胸、偃、是蓋し孕婦、其氣に感じて致所なり。泉按るに、妊婦の胎教忽にすべからず。其縁に触れ感ずる時は、種種の怪物を妊する者、其ためし少なからず。余、田擊一農婦あり。懐孕満月にして腹痛甚しく、呼ぶ声四隣に聞、余に治を求む。家人告げて曰、「破水至れり」と。余、弓湯を与ることに時許り、三點少間あつて腰痛頻にして、異物を生ず。其形獺に同。後に夫語て曰、「妊四ヶ月に及ぶ頃、吾野に出て耕す時に、溝渠の傍に獺睡臥す。

因て持つ所の鍬を以これを殺ことを成す」と。是、其物に感て積悪の致所なり。謹ざるべけんや。

(巻一「鬼胎の婦人の事」24才ウ、国会図書館所蔵本の改題本、安永三年刊『怪妖故事談』)

ここでは、金剛神や亀の「縁」「氣」に触れてそれに似た子を生んだ女人の話と獺を殺した報いで獺を生んだ女人の話がある。いわゆる物類相感や因果応報の理によつて異常出産の怪異を解釈したものといえるが、一方『盆石皿山記』でも、落穂が鹿の子を生んだことは、

牡鹿、仇を報ん為、おのれ源七と化て、彼が妻を恥しめ、すべて一族に災せんと計りしならん。是、併、落穂が悪心の天罰にて、畜生の子を孕て死恥をさらす事、因果鬪面の道理也。(第四回、4ウ)。

と、一つには源七がくじかを殺した報いであること、またもう一つには、飲皿を陥れた落穂の悪心への天罰ゆえであるとする。このように、殺生や悪心の報いによる出産の怪異を述べた話という点において、『盆石皿山記』の落穂の話は『奇疾便覧』「鬼胎の婦人の事」の話の性質に通じているといえる。

(3) 宇那提の森の蛇

第二回、宇那提の森を通りかかった源七は、妻の晩稻と妾の落穂が丑の時参りをして杉の木に釘で姿絵を貼り、それを打って互いを呪詛した跡を見付ける。さらにその二つの釘の穴からは「二つの蛇、忽然とあらはれ出、しばし咬」(12ウ)合い、釘は鹿の角に変じたのを見て、源七は世の無常を観じて出家する。この場面は高木元氏の指摘にあるように、浄瑠璃『茹萱桑門筑紫繫』(並木宗輔ほか作、享保十二年三月、大坂豊竹座初演)の、加藤左衛門繁氏が、妻牧の方と妾千鳥の前の二人の黒髪が蛇と化して食い合う様を見て出家する話に拠っている。ただ、茹萱桑門筑紫繫では繁氏が出家する際、

かく浅ましき体たらく、思はしや穢らはしや、妻子は地獄の家土産と、妻妾への嫌悪を表しているのに対し、『盆石皿山記』の源七の場合は、殺生をことごとく、刺神通を得たる鹿をころしたる、因果眼前報ひ来て、さしも睦しかりける妻と妾が、十年の年月を経て、互にころさんと禱る事、是たゞ事とは思はれず。二人の女兒も便なれど、只恩愛の羈を断、これを

菩提の種として

(第二回、12ウ)

と、妻妾の争いは自らの殺生の罪ゆえであると考える点に相違がある。

(4) 紅血飲血

源七の出家譚に続いて、物語では、晩稻と落穂のそれぞれの娘である飲血と紅血姉妹が中心的人物となっていく。もともと紅血欠皿の話は、全国各地に伝わる昔話であるが、『盆石皿山記』以前にこの話を描いた作品としては、次の四種の草双紙作品を確認できる。

①『新版 紅血鬨皿昔物語』(二巻、山本重春画作、大東急記念文庫所蔵)。

②『紅血欠皿往古噺』(丈阿作、鳥居清満画、所在不明、『続帝国文庫 黄表紙百種』所収)。

③『紅血欠皿往古噺』(二巻、富川吟雪画、安永六年刊、都立中央図書館加賀文庫所蔵)。

④『べにざらかけざら 奥州咄』(天明元年刊、三巻、伊庭可笑作、鳥居清長画、都立中央図書館加賀文庫所蔵)。

以下、これらの作品と『盆石皿山記』の紅血飲血譚との類似点を指摘してみたい。

姉妹と継母

まず、『盆石皿山記』での姉妹については、

「**缺血紅血**、**健**に生育て、その**標致**も劣らず勝らず、**只智慧才学**のみ異かはりて、**飲血**はよろづの**技**に伶俐て、**記憶**も人にすべし、**紅血**はすべての事に拙くて、」

(第二回、10オウ)

と、姉妹ともに美しい女であったが、才学では飲血が勝っていたとする。やがて姉妹の母親がくじかの呪いによって争うようになり、妾の落穂は正妻の晩稻を騙して井戸に突き落とす。

おのれ女あるじとなりて、**継子飲血**を憎事、**只是**讐敵のこころくす

(第二回、15ウ)

と、落穂の継子飲血を虐めるようになる。それに倣って妹の紅血もまた、**姉を敬す**、**少しの過**をも母に告て折檻させ、よろづわがまんに動止ける。

(第三回、17ウ)

と、姉の飲血を虐げるようになる。しかしこれに対して飲血は、

「**聊も**つらみず、**落穂**を**実の母**のこころく敬ひ親にも、なき父母の事一日も忘るゝ隙なく、」

(第二回、15ウ)

という「孝女」(第三回、25ウ)として描かれている。

このように、継母・実子(妹)と継子(姉)を対立した関係に描いた口承伝承としては「糠福米福」がある(『日本昔話事典』)。また、先に挙げた①④の草双紙のうち、継子の欠皿を善人に、継母と紅血を悪人に描くのは④『べにざらかけざら 奥州咄』である。この作品では、継母は奥州安達ヶ原の悪婆で、継子の欠皿に当たるのがおさだ、紅血としてはおむねという美しい姉妹が登場し、婆とおむねが継子のおさだを虐げる。

二人ともに器量すべし、田舎には惜しき生まれ付きなりけり。此婆、はたして姉のおさだを憎み、妹のおむねを気まま一杯に育て、姉を姉とも思わざりけり。

(おさだ)「かかさん、お肩でもさすりませう。」

(悪婆)「また姉が差し出た事を言ふ。嫌でござる。これ、おむね、ちとひなつてくりやれ。」

(巻上、一オ)

なお、他の①②③の草双紙作品にはこうした人物関係はなく、いずれも妹の紅血に当たる人物が、継母が欠皿をいじめめるのを庇うという姉妹愛を描く話になっており、④『べにざらかけざら 奥州咄』のみが『盆石皿山記』のこの部分の人物関係と類似している。

木の実拾い

『盆石皿山記』第三回では、飲血が落穂に命じられて宇那提の森で椎の実を拾う。この場面は、高木元氏によって口承伝承の「継子の椎拾い」の継子譚が典拠として指摘されている。『日本昔話事典』によれば、「継子の椎拾い」の話は、継子と実子の二人の娘を持った母親が、継子には底の破れた袋、実子にはよい袋を持たせて山へ椎拾いにやる。実子の袋が一杯になるのに、継子はいつまでも貯まらず、実を拾い続けるという話である。また、これと同様の話は、①『紅血鬨皿昔物語』にも次のようにみえる。

かくて年月移りかわりて、御家貧しくなり給い、継母いよく悪心つものり、
 継母を欠皿と名づけ、姉妹を紅皿と名づけ、姉みつ姫を憎み、さまざまの
 難題いつていじりけり。姉妹には底なき袋をあずけ、姉妹には底あるをあ
 ずけて庭の桃を拾わす。姉欠皿、桃を拾い給えども、底なき袋ゆえ、み
 な抜けてたまらねば、嘆き給う。(三十四才)

これは、母(継母)の言いつけで姉妹が桃の実を拾うという話である。また④
 『へにびらかけびら 奥州咄』にも、

黒塚の婆はこれといふ言みもなく、たゞ悪巧みやま(ず)にて暮らしける
 が、近年栗の値段良きを考え、姉妹の娘に布袋を持たせ、山へやりて、偶
 さかある落ち栗を拾わせける。その上姉には底こゝ破れたる袋を宛いける
 ゆへ、拾いし栗も大かた破れより落ちこぼれ、妹の拾いしより数少なきを
 憤り、色々折檻する。

(婆)「これ、こゝなのんつくめろつめ、おむねは毎日く」とれ 拾つて
 くるに、おのれは漸々六つ七つ、それが切なくは、明日から身に染みて拾
 へ。そのつらはなんだ。」

(おさだ)「明日からたんと拾いませうから、かゝさん、堪忍して下さん
 せ。」

(おむね)「ほんになあ、姉様のはてへに少なへのふ。」(巻上、五ウ)
 と、同じく姉妹が婆の言いつけで栗を拾う。一方『盆石皿山記』では、飲皿
 一人が落穂の言いつけで椎の実を拾いに行くことになる。

飲皿の和歌

第三回、飲皿が椎の実を拾っていると、通りかかった国主赤松義則の目に留
 まり、その孝と才を愛でられ、飲皿は宮仕えを命じられる。その時に飲皿は、
 盆皿に盛られた塩と松について和歌を詠む。

森の中に古き地藏堂ありて、何人の願たてせしにや、皿に塩をつつたかく
 盛りて、供おきしが、向の雨にうたれて、その塩半解たるを、近従に仰て
 とりよせ給ひ、又松の小枝を手折らせて、塩の上に挿み、「いかに女子、
 これを題にして、歌つかふまつれ」と仰ければ、
 美作や皿てふ山の雪とけて塩垂峰にかよふ松風

と申ければ、主従感吟大かたならず、嗚呼と賞して止ざりける。

(第三回、19ウ20才)

『盆石皿山記』のこの部分の典拠として、高木元氏は口承伝承の「皿々山」をあ
 げている。「皿々山」とは、継子(姉)と実子(妹)が水汲みをしていると、通
 りかかった殿様の目に留まり、殿様は姉妹を城へ召そうとするが、継母は実子
 の妹を遣りたいと言つので、盆と皿と塩と松とを持って来させて歌を詠ませる。
 姉が「盆皿やさらちゆう山に雪降りてそれを根として育つ松かな」と詠んだの
 で、殿様は姉の方を優れているとし、城に連れ帰ったという話である(『日本昔
 話事典』)。

この「皿々山」は、①③④の作品にも取り入れられている。まず①『紅皿闕
 皿昔物語』は、さる大名の若殿が、美人の誉れ高い紅皿欠皿姉妹の噂を聞いて、
 「盆の上に皿を置き、その上に塩を盛り、中へ小松を差し」(六才)たものを贈
 らせて、優れた和歌を詠んだ方を妻にしようとする。盆皿を前にした妹の紅皿
 姫は、姉の欠皿姫を世に立てようとしてわざと歌を詠み損なう。一方姉の欠皿
 姫は、

ほんさらやさらてふ山に雪ふりてゆきをねとしてそだつ松かな(7才)
 と詠んで若殿に迎えられるという話である。

また③『紅皿欠皿往古噺』では、九郎判官義経公の若君冠者次郎経久が鞍馬
 への忍びの旅中でさゝのさ五兵衛の家に宿を借り、そこで欠皿に出会う。欠皿
 は、

盆のうへに皿を置き、塩を盛り、若松を立て、君を寿きければ、欠皿姫と
 りあはず、
 ほんさらやさらてふ山に雪ふりて雪をねとしてそだつまつかな
 と詠じ給ふ。(7ウ8才)

と、和歌をもつて忍びの身である経久をもてなすという話である。
 さらに④『へにびらかけびら 奥州咄』では、姉妹が留山で栗を拾っている
 と役人に捉えられる。裁きの場でかもの次郎は次のようなものを用意する。

盆に皿を載せ、塩を積み、若松を差し、「これは何なるや」と姉妹に尋ね給
 ふ。姉のおさだは心しほらしきうまれゆへ、これを見て
 ほんさらやさらてう山にゆきふりてゆきをねとしてそだつ松かな

と詠じける。おむねは、我助からんと、姉を押しつけ進み出で、「それに持ち給ふは、盆の上へ皿あり、皿の上に塩あり、塩の上に松あり」と申上る。姉が歌の心しほらしきを義家御聞きあつて、「姉は助け返し、妹のおむねはまづ牢舎申つけよ」との上意なりしかば、母は泣く泣く姉を連れ帰る。

(中巻、6ウ7才)

その後、婆がおさだを責めている時に、おさだに若君からの求婚の知らせがあり、おさだは召されていくという話である。

このように、①③④の作品は「皿々山」を取り入れたものであるが、これらの口承伝承や草双紙と『盆石皿山記』の話とを比べてみると、『盆石皿山記』の飲皿が詠んだ和歌は「皿々山」や①③④の草双紙にある歌の一部を変えたものとなっている。また継母の言いつけで外で仕事をするのが姉妹二人ではなく継子の飲皿一人となっている点などは『盆石皿山記』独自の内容である。なお『盆石皿山記』の話と最も類似しているのは「皿々山」と④『べにざらかけざら奥州咄』で、飲皿が継母に言いつけられて外で仕事をしていると殿様(その役人)の目に留まったこと、飲皿が塩と小松を盛った盆皿にちなんだ歌を詠んだこと、そしてその功によって宮仕えの幸運を手にするという大まかな筋立てにおいてそれらの作品は共通している。

継母の干渉

『盆石皿山記』では、それら「皿々山」や④『べにざらかけざら奥州咄』の欠皿の幸運譚に基づきながらさらに、飲皿の出世に嫉妬した継母の落穂が、飲皿の代わりに実子の紅皿を赤松義則のところへ送ったために赤松の怒りをかい、落穂は捕らわれ、紅皿は追放される。これと同様な話型はやはり「皿々山」にも見える。継子(姉)が殿様に召されようとするのを、継母は実子(妹)を遣りたいと承知しない。歌比べによって姉が召されたので、継母は怒って妹娘を臼の下にして転がして歩き、そのために妹娘は目が飛び出て田螺になってしまったというのが「皿々山」の話(『日本昔話事典』)である。『盆石皿山記』の話は、こうした「皿々山」の、継母が継子の代わりに実子を差し出そうとしたために母子ともに却って不幸になるといふ話型を取り入れ、継母の落穂が飲皿の代わりに紅皿を差し出してしまふという話として展開させている。

なお、④『べにざらかけざら奥州咄』でも、姉妹が裁きにあうところへ悪婆が駆けつけ、一人を救し、一人を罰するように願い、おむねを救おうとするのであるが、歌比べでおさだが助かってしまふ(6ウ7才)。これもまた、継子を虐げ実子を幸せにしようとする婆の干渉が却って母子に災いをもたらしている話であり、「皿々山」を独自に展開させた内容となっている。

紅皿の末路

さらに『盆石皿山記』の第六回から八回にかけては、追放された紅皿の末路が描かれる。紅皿は錦織卯三二の妾となるが、久米鉄平とも密通し、それが露顕して二人は名手の里に隠れ住むが、やがて貧窮し二人の仲は悪くなり、紅皿は津国乳守の遊里へ売られていく。一方、『盆石皿山記』と同じく、紅皿を悪女として描いた④『べにざらかけざら奥州咄』でも、紅皿に当たるおむねの末路を描いている。姉おさだの進言によって妹のおむねも放免となるが、婆はおむねを芸者に出す(中巻8ウ10ウ)。おむねは四郎という男と駆け落ちし(下巻11才)、やがて生活に困窮して(11ウ12才)、四郎はおむねを再び切店の遊女として売る(12ウ13才)。両作品のこの内容部分は、必ずしも一致するものではないが、紅皿(おむね)が浮気心によって次第に零落していくという話の性質については両作品とも同じ内容であるといえる。

以上のように、『盆石皿山記』に用いられた紅皿欠皿譚は、①④の作品のうちでは④の黄表紙『べにざらかけざら奥州咄』が、内容上最も類似していることがわかるのだが、ただ、『盆石皿山記』がこの作品を典拠にしたというよりは、むしろ口承伝承としての「皿々山」や「継子の椎拾い」をふまえながら、④のような内容の作品を参照にしたと言っ方がよいと思われる。いずれにしても、紅皿欠皿譚は『盆石皿山記』以前に、江戸の青本・黒本・黄表紙作品にいくつにも作品化されており、当代に流布していた話だったことは確かなようである。

(5) 皿屋敷

『盆石皿山記』では、飲皿が狼に襲われるところを播州佐用山脇の郷士の岡兵衛に助けられて以降、場面は播州に変わり、紅皿欠皿伝説の「皿」の連想から、今度は皿屋敷伝説を取り入れて物語は展開する。

勇蔵が皿を割る事

第五回では、広岡家に奉公する飲皿が、ある日誤って家宝の皿を一枚割ってしまう。ところが下僕の勇蔵は、

この家の掟とて、皿を碎はその人の、命をとるとは氣疎き成敗。世に播州の皿屋敷と、唄るゝ朽をしき。御子孫長久の基にあらず。何とぞ家法をたてなほさんと、忠義に凝たる心から (13才14才)

残り九枚の皿を皆割ってしまったために広岡兵衛の怒りをかい、勇蔵と飲皿は井戸の側に縛られて折檻を受ける。翌朝人々が見ると、二人は井戸に投身した様子である。後、井戸の側で皿を数える飲皿の幽霊が顕れ、世に播州の皿屋敷幽霊井戸と呼ばれるようになる。

奉公娘が家宝の揃いの皿一枚を過って割り、娘はその責を負って自害、後、夜になると娘の亡霊が現れて皿を数えるようになり、屋敷には災いが起こり、家は衰亡していくという皿屋敷伝説もまた全国各地に伝わる伝承であるが、随筆や草子、実録、演劇など数多くの作品に取り入れられている。八重森公子氏によれば、その話の形はいくつかの型に分類されるといふ。そのうちの一つ「米春男の勇志」型は、『盆石皿山記』の話のように、残りの皿を家の下男が悉く割ってしまうという話である。それを記す書として、伴高深『閑田耕筆』(四巻四冊、寛政十一年刊)があげられている。

また高木元氏は、この『閑田耕筆』の記事と『盆石皿山記』との影響関係を指摘している。『閑田耕筆』によれば、男が残り十九枚の皿をも割ってしまった訳は、陶物であるのでやがていずれは割れてしまっただろう二十枚のために取られる二十人の命を、自分一人の命で助けようとする「義勇」心ゆえであったといふ。『盆石皿山記』ではそれを、勇蔵の主君広岡への忠義心として描き直しているのである。また、皿を割った罪で勇蔵・飲皿を折檻した広岡兵衛であったが、実はそれは「先祖の掟」(17ウ)ゆえの建前であったのであり、後に広岡兵衛は秘かに二人の縄を解き、勇蔵を「類稀なる大丈夫」(17ウ)と称えて二人を逃がす。そうした話もまた、主人が男の義勇に感じ入ったという「米春男の勇志」の話を持つ『閑田耕筆』の話に基づいたものである。

紅皿の怨霊解脱

第五回で、勇蔵と飲皿は井戸に投身し、その後皿を数える飲皿の幽霊が現れ

る。さらに第八回では、今度は紅皿が久米鉄平によって井戸に突き落とされる。飲皿に続いて紅皿もまた井戸に落とされることは、お菊・飲皿・紅皿という連想で、これもやはり皿屋敷伝説を意識した話ではないかと思われる。

さらに、第十回で紅皿の亡霊を寂霊和尚が成仏させるといふ話もまた、皿屋敷伝説の二型としてあった、菊の亡霊を僧が成仏させるといふ怨霊解脱譚に基づいたものではないかと思われる。小二田誠二氏は、実録体小説『皿屋敷辨疑録』(五冊、馬場文耕著)の最終話にある、菊の怨霊を成仏させた伝通院三日月了誉上人について、『本朝故事因縁集』(五巻五冊、元禄二年刊)の、下女の怨念を鎮めた僧の話との関連をふまえながら考証している。また堤邦彦氏は、小二田論文をふまえ、文政年中の江戸麹町常仙寺で菊女の皿の開帳が行われ、略縁起が刊行された例をあげ、『皿屋敷辨疑録』等の書によって庶民に親しまれた皿屋敷の幽霊咄が再び唱導の話材となっていたことを指摘する。これら諸氏の指摘を考えても、『盆石皿山記』の寂霊和尚による紅皿の怨霊解脱譚は、実録や講談・説教の話材から人口に膾炙した皿屋敷伝説の二型を取り入れて新たに展開させた話なのではないかと思われる。

この通紅寂霊和尚とは、曹洞宗の禅僧通幻寂霊のことで、高木元氏によれば『和漢三才図会』にその名があり、丹波永沢寺の「通幻寂霊和尚」としてその経歴が記されている。なお、それには明徳二年寂年とあることから、『盆石皿山記』に明徳の乱とほぼ同時代の人物として登場させたとも考えられる。さらに堤邦彦氏によれば、通幻寂霊の派下に属する北陸地方の曹洞門諸寺において、女人成仏の済度説話が広げられていたといふ。また『撰津名所図会』(十二冊、秋里籬島著、寛政八年刊)「青原山永澤寺」「通幻禅師」の項にも、寺院開祖としての経歴に加え、禅師を訪れた竜女を成仏させたといふ話を載せている。禅師のそうした女人成仏の逸話が、『盆石皿山記』においては紅皿の幽霊を成仏させた僧として用いられたのだろう。

久米鉄平(皿山鉄山)

第七回より久米鉄平という人物が登場する。鉄平は錦織卯三二の妾となった紅皿と密通し、大和国大沢で旅中病人となった広岡兵衛を、また熊野路で卯三二夫婦を殺して飲皿・勇蔵の仇となる。

鉄平は第十回で「皿山鉄山」と改名するのであるが、この名は、浄瑠璃『播州皿屋舗』の、細川家の家老青山鉄山を連想させる。鉄山は若殿の巴之介暗殺を企むが、陰謀が下女のお菊に漏れたのでこれを殺害して死骸を井戸に捨てる悪人である。この鉄山のお菊殺害の場面を、『盆石皿山記』では紅皿を邪魔に思った鉄平が井戸に突き落とすという話に変えている。

さらに鉄山の前名である久米鉄平の名は、久米平内を連想させる。久米平内は『皿屋舗辨疑録』では青山主膳お抱えの首切り役人久米平内兵衛として登場する。青山主膳は「至つて不仁不義の人」であり、また久米平内兵衛は「剣術捕手の上手」で「人を殺すことを何とも思はざる不敵者」というように、主従ともに悪人として描かれている。

また黄表紙『さら屋敷』(三巻三冊、柳川桂子作、鳥居清経画、国立国会図書館蔵)では、御台の梶の前の謀により、お菊は誤つて家宝の皿を割つてしまい、その罪のためにお菊は御台の命によって久米の平内に井戸で殺害されるという場面(8才〜10才)があつて、『盆石皿山記』で久米平内が紅皿を井戸で殺害するという趣向において類似している。ここでの久米平内も「てんせい人をきることをこのみ(4ウ)」という人物であり、向坂甚内に扮した阿部定任の残党いでの十郎の首を斬る悪人として描かれている(5ウ)。このように、皿屋敷伝説の作品の中には久米平内が登場するものがあり、『盆石皿山記』では、そうした作品に描かれた久米平内の悪人としての印象をも、久米鉄平の人物像として取り入れているといえる。

(6) 筑摩の神事

第八回で、紅皿は他の旅客の米を盗んだ天罰により、被つた鍋が頭から外れなくなつてしまふ。被つた鍋が取れなくなつてしまふのは、『はちかつぎ』の話に似るが、紅皿という悪女のことを述べた内容上、また、

頂に、すつぽりかぶりしあし鍋は、なべて呆れぬものもなく、息を筑摩の祭ならずは、鉦とられし落武者の、途をつしなふに異ならず。(第八回、8ウ)

とあることから、この話は、関係した男の数だけ女人が鍋を被るという筑摩神社の神事のことをも取り入れたものと思われる。『和漢三才図会』(20)「近江」の項に次のようにある。

築摩明神 同郡に在り 祭神 御食津の神 祭四月朔日

筑摩の庄は大膳の職、御厨の地也。運送の事、延喜式等に載す。故、御食津の神を祭るか。蓋し此神、稻食を掌るに依りて、里の女嫁を為す則、祭祀には必ず鍋釜を戴き、之を神に奉る。如し再び嫁する者は二枚、三たび嫁する者は三枚、之を被ぎて祭の日、神幸の後に候す也。中世、業平の花詞に倣て、里の婦、笑麗を驚、数板を重ねて艶熊の故を為。固に胡蘆べし。

仁寿二年神階従五位下を加ふ。

拾遺 近江なるつくまの祭はやせなんつれなき人の盤の数みん 業平

『和漢三才図会』には、結婚した数だけ女人が鍋釜を被つて参詣する神事と記されているが、業平の歌を載せる『伊勢物語』百二十段にもあるように、この神事は女性の浮気心を咎める意味のものとしても伝わっているようである。『盆石皿山記』では、これを紅皿が盗みの罪によって被つた鍋が取れなくなった話に変えている。なお馬琴は後の『新累解脱物語』(五巻五冊、文化四年刊)にも、玉芝という女性の人物描写の中にこの神事のことを取り入れている。

父丹下が管領の御内にありしとき、密夫あまたして、筑摩の祭などにあはど、戴く鍋の数も多かるべき女子なり。(巻之一、15才)

(7) 源七と鉄皿の再会

『盆石皿山記』第十回で、鉄皿・勇蔵は、丹波国光明寺のところで敵鉄山を討ち、その後寂霊和尚の弟子角阿弥となった源七と再会する。この場面は、出家した父とその子の再会という点で、説経『かるかや』や、高木元氏が指摘するように浄瑠璃『苅萱桑門筑紫轢』に基づいたものと思われる。説経『かるかや』では、出家した繁氏は法然上人との誓いを守つて石動丸との親子の対面を遂に成すことはなかった。また『苅萱桑門筑紫轢』では、石動丸らとの再会の場で、師の阿闍梨との誓いを守つて父親の名乗りをせずいたところ、連れのお母が僧を繁氏と感づく、という話になっている。このように苅萱の世界では、繁氏は師に誓つた出家としての戒めを守ろうとするのだが、これに対し『盆石皿山記』の源七(角阿弥)の場合、やはり苅萱の繁氏と同じように、光明寺ま

で尋ねてきた飲血・勇蔵と「名告あはじと思ひながら、しかし「彼等が孝心の切なるに躊躇して」(第十回、27ウ)隠れることができない。またその様子を見ている師の寂霊和尚も、

いかに角阿弥 仏も元は凡夫なり。子にあふ事をふかくな聊そ。(同)

と、父子の対面を却って勧めている。このように、出家としての戒めよりも親子の縁を重く考えようとする点に、苅萱説話からの展開をみる事ができる。

三、おわりに

以上、『盆石皿山記』について典拠との関係を中心に述べてきた。作品では、庶民に親しまれたいくつかの伝承説話の話を取り入れながら、勇蔵・飲血の忠義・孝心や、落穂の嫉妬、紅血の多淫と盗み、鉄山の殺人など、善悪に別れる登場人物像を描いている。また物語構成として、飲血・勇蔵の仇討ちという主題の外側にさらに、くじかの神罰的な祟りという物語全体を貫く主題を設け、それによって伝奇的、或いは勧善懲悪としての内容を備えている。そうした複層的な物語の構成からも、横山邦治氏が「単純な仇討ち話から脱却し始め」たと指摘する作品としての性格を見ることが出来る。またこれは後の馬琴読本にも見られる物語構成法でもある。例えば『新累解脱物語』(文化四年刊)では、珠鶏という女性の怨念が、そして『三七全伝南柯夢』(文化七年刊)では老楠の祟りが、それぞれ物語の始終において登場人物に影響している。『盆石皿山記』は、そうした馬琴読本世界の先駆的作品といえることができるのである。

(注)

- (1) 『江戸文学と中国文学』(昭和三十年、三省堂)第三章、64頁。
- (2) 『読本の研究 江戸と上方と』(昭和四十九年、風間書房)第一章第二節、247頁。
- (3) 「構説『張月の史的位』」中村幸彦著述集『第五巻、昭和五十七年、中央公論社』422頁。
- (4) 『盆石皿山記』(前編) 解題と翻刻「(一)」研究実践紀要『第七号、昭和五十九年六月』、『盆石皿山記』(後編) 解題と翻刻「(一)」研究実践紀要『第八号、昭和六十

年六月)。

- (5) 国文学研究資料館マイクログフィルムによる。
- (6) 以降、『盆石皿山記』の本文は国立国会図書館蔵本(208161)に拠った。
- (7) (4)に同じ。
- (8) 『浄瑠璃名作集上』日本名著全集、昭和二年、523頁。
- (9) 『日本昔話事典』弘文堂、昭和五十一年。
- (10) (4)に同じ。
- (11) (4)に同じ。
- (12) 伊藤篤氏『日本の血屋敷伝説』(平成十四年、海鳥社)第二章、22頁。
- (13) 「血屋敷伝説考」、『国文自白』第二十六号、昭和六十二年二月)。
- (14) (4)に同じ。
- (15) 「実録体小説の原像 「血屋鋪辨疑録」をめぐって」、『日本文学』昭和六十二年十二月)。
- (16) 『近世説話と禅僧』(平成十一年、和泉書院)第二章、IV「血屋敷伝説と説法僧」。(4)に同じ。
- (17) (4)に同じ。
- (18) (16)書、第一章「曹洞宗と説話」II「竜女成仏の近世的展開」三。
- (19) 『近世実録全書』第一巻(昭和八年、早稲田大学出版部)7、8頁。
- (20) 『和漢三才図会 下』(昭和六十一年、東京美術)884頁。
- (21) 『曲亭馬琴作 新累解脱物語』(大高洋司編、昭和六十年、和泉書院) (4)に同じ。
- (22) (2)書、第一章第二節、255頁。

* 本文を引用するにあたり、漢文・片仮名文は平仮名文に改め、適宜濁点・句読点を補った。また(4)に引用した①、④の草双紙については、平仮名を適宜漢字に改めた。

* この論文は、平成十五年度科学研究費補助金「若手研究B」(課題番号14710303-00)によるものである。

* 本稿を成すにあたり、国文学研究資料館、国立国会図書館、都立中央図書館には閲覧および複写のお世話をいただきました。ここに御礼を申し上げます。

(平成十五年九月三十日受理)

* * A Study of "Bonseki-sarayama-no-ki" / Yoshiko YUASA (Department of Japanese Language and Literature) (Received September 30, 2003)